

ので一生懸命働いていたが、二十一年四月、引揚げ命令に接した。院長は止むを得ないといい、「道貴実行又貴乎中不行不行不中」の揮毫した掛軸をふみ子氏に渡しながら悲しげな顔をされた楊院長が深く深く印象にのこったと語るふみ子さんの涙声をきく、彼女の人徳ここにある。

引揚げて、もしやふみ子女史より早く復員しているかと思つたが、愛する主人は帰らず、昭和は過ぎて、平成四年を迎えた。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助

満州での逃避行（子どもの霊に捧ぐ）

北海道 中村 久尚

私は昭和十五年十一月に、甲府第四十九連隊を除隊と同時に、満州への農工開拓移民に応募し合格したの

で、翌十六年、妻を娶り同年十二月十四日と記憶しているが、確か大東亜戦争の始まった直後だった。

全国各地より集まった人達と満州牡丹江省東寧河沿第十五野戦兵器廠に軍属として、勤務を命ぜられ農地二町歩を与えられた。

この農耕については満人農家に委託し、収穫物は部隊で買い入れてくれることで河沿地区に入地した。

我々の部落は十戸・三十人ほどの小さな部落だが、誠に平和な静かな日々を送っていた。昭和二十年八月八日だったか、いつもの通りの出勤で営門をくぐった八時ちよつと前だった、突然、ソ連の飛行機の襲来と機銃掃射とで、上を下への大混乱となった。

既に幾人もの負傷者は出る、その中を兵舎に入るや上官命令により、家族のある軍人軍属は直ちに家に帰り、戦事軍装になり、家族は一步たりとも外に出さぬよう戸締めして、一時間以内に隊に集合せよとのことだった。これは出勤ではなく、戦時出勤だった。

家族にはこの次第をよく言い聞かせて帰隊し、上官の命令下に入ったが、数時間後、又命令が出て、家

族ある軍人軍属は、家族全員を直ちに隊の地下弾薬庫に収容せよとのことだった。

この頃はもう飛行機の姿は全くなかったので、家族の収容は容易だった。

急いで家に帰り女子供を全員隊の地下弾薬庫に収容し終えてはっとする間もなく、今度は大きな戦車が五、六台肉眼で良く見える位置まで侵入してきた。

我々も渡された三八式歩兵銃でこれに応戦を続けてみたもの、戦車に小銃では通ずる由もなく、この儘では我々も駄目だし、地下弾薬庫の家族も敵の手に掛りオモチャにされてしまうので、困ったことだがと心配をしていた時だった。

最後の部隊命令として、軍属は家族の入っている弾薬庫を手榴弾で爆破し、男達はソ連に応戦すべしとのことだった。

我々は渡された手榴弾を数個、庫内の家族達に向けて投げ込んだが、全く破裂せず、家族の「痛いよ」の声だけだった。

庫内は真っ暗なので中の様子が全然わからないが、

投げ入れた手榴弾が発火せず女子供にぶち当たっているのだ。「これは駄目だ、手榴弾はみんな湿気ているのだから駄目だ。早くせんと戦車が来たら終りだぞ。」

仕方ないから小銃で乱射して人だけ殺そうと決めて決行に入ろうとした時、幸か不幸か庫外通路の片隅に置いてあった非常用のカーバイトランプが男達の目に入った。

「オイ、これでは駄目か」と言うことになり、「よし、やってみよう、このガスでみんな死ぬるかも知れんぞ」ということで、六、七本あったランプ全部に火を点けて、「早く殺して」と叫ぶ女子供達に、今度は大丈夫だからと言い残して、三重の扉を全部閉めて表に出た時だった。

軍人家族達の入った弾薬庫が爆破されて大音響と共に黒煙の揚がるのが見えた。

私達も家族が早く静かに死んでほしい、と願いながら、数時間敵対行動を続けたが、家族の様子が気になるし、日暮れも迫って来たので、弾薬庫の様子を見に行くことにした。

みんなで恐る恐る一枚ずつ扉を開けて三枚目の扉を開けてまた驚いた。中は大さわぎだ、一人も死んではいないではないか。

女達に聞くと、一時は苦しい時があったので、今度こそ死ぬると思ったのに、カーバイドが燃え切れたのか次々消えてしまったとのことであつた。

もう万事休す、仕方なく、全員を連れ出して山へ逃げることにし全員で二時間ぐらい歩いたので、一里ぐらいは山奥へ入つたと思ふ所にちよつとした広い場所が見つかったので、そこで休息して善後策をみんなが話し合つた結果、家族の多い家庭や老人のいる家族はこの場で自決し、若い家族の少ない健康な人達は、逃げ延びられるだけ逃げ延びることになり、家族の多い橋内さんや鈴木さん、身体の弱い伊佐山さん達はよし行こうというが早いか、家族を全部向かい正面に立たせて小銃で一人ずつ射つたのであつた。

小学生や中学生の子供などは大声で「天皇陛下万歳」を叫びつゝ、射たれて死んでいったのが今なお心をえぐられる惨状だつた。

そんな物凄しい惨状をあとに、我々若い六家族は、その夜の内に次の安全地帯を求めて出発したのだが、私より一つ年上の上重君には、三歳になる男の子が一人おり、夫人は臨月のお腹だつたので、三歳の子供をこの場で愛の手に掛けてしまつたので子供づれは私達だけになつた。

一歳の女の子だつたので、死ぬ時は一緒にと心に決めて背負つて出発した妻と代る／＼背負い続け、子供が至極達者で元気だつたのが救いだつた。

その夜は一晚中、山の中を歩き廻つて、ひとまず安全らしい場所に着いた時は、すっかり夜も明けて静かな朝だつた。

昨夜のあの出来事が信じられないぐらい静かな夜明けだつた。

ここで暫く休けいしていくことにして、横になつたり寝ころんだりして休んでいた時、ちよつと前についた上重君の夫人が産気づいて苦しみ出したのには驚いた。

女達が手伝つて取り上げ、生まれた子供はすぐに穴

を掘って埋め、みんなから手拭い等を集めて産後処置をした上、暫く休んで出発することにした。

上重君達は無理だろうから、後から来るよう話したが、みんなに迷惑はかけないので是非一緒に連れて行ってくれと言う。

ここに二人だけ置いていかれたら、死ねということだ、頑張るから一緒に連れて行ってくれと泣かんばかりに頼むので、ひとときだけ休んでのちに出発するとで全員合意。

いよいよ出発したが、未だ夫人は下半身は血みどろだった。ほとんど上重君が背負つての数日だった。私も出来る限り、休けいを長目にとりながらの南下だった。

上重君も大変だし、夫人も出血がなかなか止まらないうちなので、二、三日で駄目だろうと思つたが、何と一緒に引き揚げたことを書き添えておく。

それから上重君を含む私達は、深山での生活が六十日続いた。毎日五里くらいを南下することに決めて、太陽を目当てに吉林市の方向を目標に歩き続けた。

食べ物はデンデン虫と百合の根とが常食だった。満州の深い山にはカタツムリは非常に多くいるので、これを潰して肉を取り出し、百合の根や雑草と一緒に煮て食べる毎日だった。マッチや塩がなくなると、満人の部落を探して二、三人で押し込み押し込み盗んでは、また、山へ帰つての生きざまだった。

夜も昼もなかつた八月九日に、山に入り、十月四日の最後の襲撃を受けて手を挙げて里を下りるまでの二か月の間に大小八回ほどの満人達の襲撃を受けたが、その都度何人が殺された。

最後に残つた同志は八人になってしまった。私は十月四日の襲撃の時にととう子供を亡くしてしまつた。本当に残念だったし、子供には申し訳なかつた。

この頃は途中で出逢つた兵隊さんと私達八人とで十三人ほどの集団で行動を共にしての毎日だった。

十月四日だった。この日は兵隊と私達とで満人部落へ微発に出かけたのだが、途中の畑の中に牛が四、五頭いたので、その中の一頭を連れて帰り、大分山奥へ這入つたと思われるよい場所で、その牛を殺して、そ

の肉を焼いて食糧とし、又山奥へ這入るといふことにした。

この日は朝のうち初雪がチラ／＼と降り、一面さつと白くなったことでもあり、大分奥でもあり、襲撃もないだろうと決め込み、兵隊達は早く肉を食い度いと、もう牛を殺して料理が始まった。

私もみんなで薪集めをし、火を焚いたりして、たちまち焼き肉の山が出来て、袋や雑のう等に詰め込めるだけ詰め込んで、久し振りに食べ放題食べて、女の人達は天幕などを広げて思い思いの話に花を咲かせたり、道中の苦勞話に夢中の組もあった。

又、男達も久し振りのご馳走に満足しながらこれらの行動等について話し合っていた時、突然、パンパンと右前方の小高い山の方から銃声三発ほど打ち込まれた。

みんな飛び上って驚いた。それ火を消せ、荷物を持って山の中へ逃げろ、大さわぎになった。

一方、妻と向い合つて子供を真中には喜んで楽しんで話し合っていた牧内さんの奥様に最初の一発が当

つたのだ。ブツという音と同時に「ウーン」と言ったきりで、奥さんは全く動かなくなったのだ。

妻も自分に当たったと思つたのか、腰がたたなくなつて困っているし、私は眠っていた子供を抱きかかえると、妻の手を引いて、木立の多い山の中へ引き込もうとするが、眠っていた子供を急にさつと抱きかゝえたので、びっくりして泣き出した。敵の銃弾は泣き声を追つてパンパン打ってくるので、これはいかん、こんなことをいつまでも続けていたらみんな殺されてしまう。

『みんな早く逃げてくれ、僕達はここで死ぬから早く行け』と言いつつ、私は決心した。子供も妻も他人の手によつて死なせはしないぞと言ひ聞かせながら子供に手をかけてしまった。

泣き声が止んだとき、銃声もなくなった。子供は死んでしまった。山の中は気味悪いほど静かになったのだ。

さあ今度は自分達だぞと、自決用に肌身はなさず腰に結び付けていた手榴弾を取り出し、先ず妻からと思

い、安全弁を抜いたが、どうしたことか、これを打ち付けることが出来ない。

一体どうしたことだ。この時一発の銃声が聞こえたら、一氣にたゞき付けたらうに、駄目だ。死ねない、何と情けないことだろう。

妻もやっと正氣に戻り、父さんどうしたの、早くと言っているのに、氣持も手も動かない。只、呆然と立ち尽くすだけであった。

正に生死とは紙一重の違いであるのを身をもって味わったのだった。

可愛い子供に手を掛けてしまったのに、自分達は死ねない。

そんな馬鹿なことがと二人とも只々、茫然と立ち尽くした数時分。

二人がやっと我に返り顔を見合せて、これからどうしたらよいのだ。

子供には取り返しの出ないことをしてしまつたのだ。

二人の親は言葉もなく、近くの松の根元を手と棒で

穴を掘り、子供を埋めるのが精一杯だった。

その時の山の中は、もう真つ暗だった。ここにいる限り、いずれは狼たちの群れに襲われることは時間の問題だ。

そんなことを考えながら、何げなく前方を見つめた眼に、うっすら降つた雪の上にみんなが逃げて行つた足跡が見えたのだ。

そうか、子供には申し訳ないことをしたが、許してもらい、次の死ねるところまで行くことに決心して、また妻と二人でうすい月明りを頼りに薄雪の中の足跡を目当てに、同志の後を追うこと二時間ほど経つた頃、遙か前方にホタルの光ほどの明りが、ぼつんと一つ目に入った。

喜びと不安とで近づいて、二百メートルほど離れた所に妻を待たせて、一人で静かに明りに近づいて行つた。

畑の中の監視小屋だった。犬がいると困るなと思いつながら、だんだん近づいて行くと、日本語での話し声が聞こえた。正しく同志達の声だった。

入口の筵戸を上げて、僕だよと声をかけると、兵隊は既に銃を向け打つ身構えだったので、「中村だー」と言つて、これを制して中へ入り、一部始終を話した上で、待たせて置いた妻を連れて来て皆に会わせた。

子供のことでみんなから同情も受け、これからの励ましも頂いてホツとしたもの、子供と牧内の奥さまを失つた淋しさは、シヨックとなり、みんな言葉少ないひと時だった。

折角みんなで苦心して求めて作つた食べ物も荷物も、殆ど置いて逃げて来たので、又、着のみの儘の出発に戻ってしまったのである。

更にみんなの話を聞いて困つたことは、この小屋に一人でいた満人を兵隊さんが殺してしまつたということだった。

もう夜明けも近いことだ。朝になると満人の家族が朝食を持って来るだろうから、暗い内にこの小屋から出来るだけ遠くへ逃げないと危険である。

畑の黍などを焼いて食べ、又、みんなで山へ逃げ込み、一晩中、山の中を歩き廻つての末、うす明るくな

つて驚いた。

みんなして「アッ！」と声を出すほどびっくりして私はそこへ座りこんでしまつた。

一晩中歩いて大分山奥へ来たと思つていたのに、目の先に黄金に色づいた稲田が見える。山の突端に出てしまつたのだ。どうしようということになった。

昨夜は番人を殺して来たので、後ろへは戻れない。今頃その部落では大騒ぎしているだろう。

いよいよ万事休すだ。われわれ軍属は前方部落へ手を挙げて出ることにしたが、兵隊達は関東軍が来るまで頑張るんだ、と言つて山に向かつて去つて行つた。

私達は今日まで肌身離さず持ち歩いていた自決用手榴弾まで掘つて埋め、全くの避難民となり、部落へ下りて行つた。

田畑で働いていた人達は匪賊でも出たかのように、大騒ぎしながら家の方へ逃げて行くので困つてしまひ、射つて来られたら大変なことになるので、「違ふんだ」と呼び止めながら、みんなその場に座つて、両手を高く上げて助けを求めたので、大勢が近寄つて来

て話を聞いてくれました。朝鮮の人達が稲を刈っていたのである。

早速、部落へ連れて行かれて身体検査を受け、金目のものは全部取られたが、六十日ぶりに米の飯を食べさせてくれ、本当にうれしかったし、美味しかった。

誰ともなく、もうこれで死んでもいいよ、そんな声
が二、三の者から飛び出るほどの実感だった。

暫くして満人の世話役のような人が来て、これからお前さん達をソ連軍に引渡すために出発するから全員外に並ぶようにといわれた。前後に監視されながらの出発でした。何せ敵中の行動なので少しの気も許されず、十里以上の道程の中一晩野宿といわれ、これは危ないぞと警戒したが、何事もなく翌日昼頃ソ連軍に到着、日本人の通訳がいて日本の様子を説明され終戦を知らされた。

引揚げはいつになるか解らないが順番が来るまで待たなければならぬと聞かされ、これは大変なことだ、こんなところで冬越しはできない何とか吉林の街まで出してほしいと通訳の青年を通して頭を下げて頼んだ

が、敗戦国民の悲しさ、駄目の一声で返す言葉もない。

この地は吉林市から大分離れた敦化という村で治安もあまりよくないのと日本人の少ないのが一番心細い。皆半ばあきらめていた時、私の妻が身体検査を受けた時素早く自分の腕時計を髪の毛の中に隠していた。

二か月もの長い間クシを通したこともなくボサ／＼していたので見つからなかった。

この時計をソ連の下士官に渡して、吉林駅まで送って貰いたいと頼み込んだところ、承知してくれた。無蓋車で吉林まで送ってくれて日本人収容所に到着した。皆抱き合って喜びあった。

私達の収容所は二百人ぐらいで生活が始まった。私達新入りはスコップを持ち下水掃除組と池を掘る組と、婦人達は家の掃除とシラミ取りが日課だった。夜になるとソ連兵が収容所に入ってきて女を出せという。皆金を出し合って元接客関係の女性を頼んで何とかした。

私と一番気の合った、六十日山中を逃げ廻った水関

君夫妻が発疹チフスで前後して二人とも急死した。この収容所はシラミの発生が多く、毎日死亡者が出る。コモに包み荷車に積んで捨てて行くのが一番嫌な仕事だった。

ある日私は仕事を探しに歩いてきたところ、五十歳ぐらいに見える恰幅の良い満人紳士が近づいてきて君ムージャン（大工）だろうと行って私の顔をじっと見つめるので一瞬いやな感じだったが大工ですという、実は頼みがある、私の家を修理してほしいといい、一緒に行つて見てくれと幌馬車に乗った。これはいかんこの人は八路軍の幹部に違いない、誰か日本人が来たら飛び下りて助けを求めようと決心したが誰にも行き合わない。気持ち急いでいたが表面だけは落ち着いて見せていた。

紳士に気付かれては大変だしと緊張が続いた時馬車が門がまえの家の前に着き、そのまま中へ入った。

あ、もう駄目か、よし行くところまで行つてみろまだ俺にも知恵の持ち合わせはあるぞと、何食わぬ顔で馬車に乗ったま、いたところ、彼の紳士が静かに誠に

丁寧な家を案内してくれた。奥さんがお茶を持参してくれ、ご主人に私の仕事を聞いたところ、仕事の話より私の身の上話や、戦前の職業とか現在の生活状況などを真剣になつて聞きたただすので、私も何のうたがいも又、かくすこともなく、むしろ親近感すらおぼえ今までのことを話しました。

ご主人はすっかり打ちくだけた口調で、今度は主人が自らの身分や存在をすっかり話してくれての上で、私に向かつて良く正直に色々の話に答えてくれたね、私もできるだけの面倒を見てあげるので頑張れよとまで力強く言つて下さったのです。

私はいささか面喰つて我が心に問い掛けました。

馬車から飛び降りて逃げようと、今が今までスキあらば逃げて見せるぞと心に決めていたのに。主人の神様のような有難い言葉に返す言葉すらなく、只々主人に感激するのだった。

この主人の家はこの部落での旧家で吉林市での世話役であることを知らされ二度びっくりしました。

この日は古い板戸の修理をさせて貰い、明日からは

玄関等の改造、修理に掛かることで、その日は帰宅することを主人に話して諒解を求めましたところ、明日から来るようにいわれました。

後片付けをして門を出ようとしたところ、主人はこの馬車で帰りなさい、今朝私と逢ったところで下車するようにいってあるというではありませんか、本当に驚きました。

この人が昨日まで敵国人扱いをしてきた満州人とは思えません。そうして次の日からこの部落への通勤が始まったのです。

十月の約八か月の間は、私はこの部落の全戸の皆さんにお世話になったのです。

あの主人が自分の家の仕事が全部終わったあと次の家、そうして又次の家というように皆さんに頼んでくれますので、私はこの部落の御抱え大工さんのようにして頂きましたので仕事の無い日はありませんでした。

祝祭日の休みには私ばかりでなく、妻までも馬車で迎えにまで来てくれた人達です。

そうして帰りには又馬車で家の前まで送ってくれる上にギョーザ等を始め珍しい中華料理を腹一杯食べさせて頂き、帰りの土産まで持たせてくれる人達でした。部落の老人の人は、私たちを自分達の子供のように若い人達は旧知の友達のように接してくれた数々の想い出が、こうしてペンを執り次々と脳裏に浮んで来ます。

敗戦国民である私達に何故どうしてこんな親密的行為を、人間として当り前だろう、日本人にはできなくとも、我々満州国民には日常茶飯事だよと何時言われるだろう、そんな錯覚にさえ落ち入る時もありました。敗戦後間もないのに、全く敗戦国民という意識すら感じさせないほどの親切をいただいて今日まで生き長らえて来た私です。

私達がいよく引揚げる時が参りましたので妻を連れ、気持ばかりの手土産を下げて部落の皆さん一戸々々を訪れ、引揚げに対する実情報告と八か月にも亘る長い間お世話になったことのお礼と、そして何より淋しいお別れの挨拶に廻ったところ部落の皆さん全員が

一か所に集まって下さり、「ツンソン中村帰るなよ、日本は戦争に敗けたのだぞ、中村さんの考えている日本ではないと思うし、私達が皆で面倒見て上げるので今まで通り吉林にいなさい」と言われた時は本当に嬉しかった。

未だ年若い私も妻もぐっとこみ上げて、嬉し涙の止まるのを忘れる暫しでした。

その場面をそして他国での光景をご想像下さい、部落のみなさんがあまりにも真剣に真心をこめて言ってくれるので、返す言葉もなく只々ありがとう、の繰り返しでした。

「日本も戦争には負けたが両親や兄弟が生きていると思うので一度会って来る。そうしてきくと皆さんのところへ帰って来るから」と言って涙ながらに別れて参りました。

吉林駅を出発した列車は次の日の夕方コロ島に着き、その日の内に興安丸という大型引揚船に乗船できました。

この時初めて、よし、これで日本に帰れるのだとい

う実感にひたつたのでした。

九州佐世保港に入港、本船から上陸用に移った時、妻が急に産気づき八か月の早産で、小さな手の平にのるくらいの子でしたが非常に元気だった。

船中での出産は非常に喜ばれ、縁起の良いことだと言われ、船長さんが出産祝の儀式までしてくれ、勝彦と命名して下さいました。

二時間ほど遅れましたが子供の衣類などを貰い発車の準備をしていたところ、妻が急に発熱し産褥熱にか、り町の病院に入院させ、子供も一緒に約一か月ほどか、り、やっと回復して列車に乗った。

荷物は客室に置けず乗降デッキに置いたまま疲れが出てちよつとの間、うとくと眠ってしまいました。荷物が気になって見に行つたところ子供の荷物もろ共なくなつてしまった。驚いて車掌に話したところ、又やられましたか……と言う、引揚列車を専門に物盗りするグループがいて、列車から落す組とそれを拾い集める組とで荒し廻っているので困っているとのことを聞いて、私も腹が立つのと情けないので残念であつ

た。

あの時吉林でお別れに行った私に「中村よ、日本は戦争に負けたのだから君が思っているような日本ではないと思うので帰るなよ、俺達みんなで面倒を見てやるから」といつてくれた中国の人達の一人々々の姿や面影が目に見えてきて、他国の人達でさえもあのようについてくれたのと思つた時に初めてやる瀬なく、腹が立つて来てこんなことを許しておく日本かと前後も忘れて、その車掌にまで当りちらしてしまつたのです。

終戦後の吉林で一生懸命働いて買い集めた世帯道具や鍋や釜、そして上陸の時いただいた子供用の衣類などを故郷へ帰つたらすぐに使わねばと満州から背負つたり、下げたりして本当に何よりの宝物のようにして持ち帰つた。

私たちにとって本当に貴重な品物を全部盗られて、又無一物の裸一貫になって、生れ故郷へ帰れとは、余りにも無慈悲な仕打ちだったので。

山梨の実家に世話になり、昭和二十三年まで桐の下

駄を手作りで作り農家を廻り、米と物物交換その内に専門に廻る奥さん方もでき下駄作りが大変繁盛したが、機械を導入して競争する同業者が出て来たので北海道に新天地を求め、ニッカーウイスキーで有名な余市の隣り村の赤井川村に居を構え、長い間苦勞をしたが、現在は漬物製造販売を営業し昭和四十二年赤井川村会議員に当選、現在で六期勤めている。

執筆者の横顔

中村久尚氏は、大正六年に山梨県に生れ、頑丈な身体に恵まれ、兵役に在つては優秀な成績をおさめた中村氏としては、またとない人生学習として大きな意義があつたものと思われる。

昭和十五年に満州農工開拓移民として牡丹江市の日本軍第十五野戦兵器廠軍属として採用になり、全国から選抜された十戸、三十余人が入植した。

それぞれ一戸当り二町歩の田畑が与えられたが、現地満州農家の方々に耕作させて、できた収穫物はすべて日本軍部隊で買い上げてくれるしくみになつていった。

開拓者も現地満州農家にも平穩無事で何のいさかいもなく、収入はある、生活に波風なく平和そのものである。

中村氏は十戸世帯仲間世話面倒をみることは、何の苦もなく世話しても恩にきせる気もない人柄から、みんな信頼して十戸部落のまとめ役をしていた。

それが、昭和二十年八月ソ連の不法越境で、たちまち危険きわまりない状況となった。

日本軍隊との関係深い開拓部落なので、それは当然であった。

ソ連軍の襲撃、掠奪、暴行、殺戮にあり、最早、開拓者を守る日本国が崩壊した以上は、守るのは我自らの外にないというので逃げる方法しかない。そのうち現地満州人からの暴動にあり暴行、掠奪のかぎりをつくされた。野も山も川もすべてが徒歩以外になく、そのうち老人、子供と一緒に連れて逃げられないので、団員の中では自らの手で自決してしまつた。もう生も死もわけがわからなくなつた逃避行である。逃げる最中に山中で出産した婦人は赤子を直ぐ穴を掘つて埋め

た、正に地獄である。食べるものは、カタツムリ、百合の根、何でも食べる。人間の生き方ではない。鳥獸と全く同じである。妻から、お父さん、私と子供を殺して下さい、と合掌して哀願されたが、遂に殺せなかつた、と中村氏は、今も涙ながらに語る。

引揚げて、故郷の山梨に着き、親戚縁故者からお世話になつたが、第二の人生を新天地、北海道に求め、家族の協力で漬物製造と販売業を経営している。

その間、村議会議員となつて当選六期目になるが、村民のため、特に恵まれぬ、光りにあたらぬような方々に、公共のために一身をささげて精進している姿は、天晴な満州開拓の引揚者であると賞したい。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)